

1. さて、モーセはイスラエル人をみな呼び寄せて彼らに言った。聞きなさい。イスラエルよ。きょう、私があなたがたの耳に語るおきてと定めとを。これを学び、守り行ないなさい。
2. 私たちの神、主は、ホレブで私たちと契約を結ばれた。
3. 主が、この契約を結ばれたのは、私たちの先祖たちとではなく、きょう、ここに生きている私たちひとりひとりと、結ばれたのである。
4. 主はあの山で、火の中からあなたがたに顔と顔を合わせて語られた。
5. そのとき、私は主とあなたがたとの間に立ち、主のことばをあなたがたに告げた。あなたがたが火を恐れて、山に登らなかったからである。主は仰せられた。
6. 「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。
7. あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
8. あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。
9. それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
10. わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。
11. あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
12. 安息日を守って、これを聖なる日とせよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。
13. 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
14. しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。——あなたも、あなたの息子、娘も、あなたの男奴隷や女奴隷も、あなたの牛、ろばも、あなたのどんな家畜も、またあなたの町囲みのうちにいる在留異国人も。——そうすれば、あなたの男奴隷も、女奴隷も、あなたと同じように休むことができる。
15. あなたは、自分がエジプトの地で奴隷であったこと、そして、あなたの神、主が力強い御手と伸べられた腕とをもって、あなたをそこから連れ出されたことを覚えていなければならない。それゆえ、あなたの神、主は、安息日を守るよう、あなたに命じられたのである。
16. あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が命じられたとおりに。それは、あなたの年齢が長くなるため、また、あなたの神、主が与えようとしておられる地で、しあわせになるためである。
17. 殺してはならない。
18. 姦淫してはならない。
19. 盗んではならない。
20. あなたの隣人に対し、偽証してはならない。
21. あなたの隣人の妻を欲しがってはならない。あなたの隣人の家、畑、男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」
22. これらのことばを、主はあの山で、火と雲と暗やみの中から、あなたがたの全集会に、大きな声で告げられた。このほかのことは言われなかった。主はそれを二枚の石の板に書いて、私に授けられた。

23. あなたがたが、暗黒の中からのその御声を聞き、またその山が火で燃えていたときに、あなたがた、すなわちあなたがたの部族のすべてのかしらたちと長老たちとは、私のもとに近寄って来た。
24. そして言った。「私たちの神、主は、今、ご自身の栄光と偉大さを私たちに示されました。私たちは火の中から御声を聞きました。きょう、私たちは、神が人に語られても、人が生きることができるのを見ました。
25. 今、私たちはなぜ死ななければならないのでしょうか。この大きい火が私たちをなめ尽くそうとしています。もし、この上なお私たちの神、主の声を聞くならば、私たちは死ななければなりません。
26. いったい肉を持つ者で、私たちのように、火の中から語られる生ける神の声を聞いて、なお生きている者がありましょうか。
27. あなたが近づいて行き、私たちの神、主が仰せになることをみな聞き、私たちの神、主があなたにお告げになることをみな、私たちに告げてくださいますように。私たちは聞いて、行ないます。」
28. 主はあなたがたが私に話していたとき、あなたがたのことばの声を聞かれて、主は私に仰せられた。「わたしはこの民があなたに話していることばの声を聞いた。彼らの言ったことは、みな、もっともである。
29. どうか、彼らの心がこのようであって、いつまでも、わたしを恐れ、わたしのすべての命令を守るように。そうして、彼らも、その子孫も、永久にしあわせになるように。
30. さあ、彼らに、『あなたがたは、自分の天幕に帰りなさい。』と言え。
31. しかし、あなたは、わたしとともにここにとどまれ。わたしは、あなたが彼らに教えるすべての命令——おきてと定め——を、あなたに告げよう。彼らは、わたしが与えて所有させようとしているその地で、それを行なうのだ。」
32. あなたがたは、あなたがたの神、主が命じられたとおりに守り行ないなさい。右にも左にもそれではならない。
33. あなたがたの神、主が命じられたすべての道を歩まなければならない。あなたがたが生き、しあわせになり、あなたがたが所有する地で、長く生きるためである。

## 説教

申命記5章はモーセが十戒をイスラエルの民に教える場面です。シナイ山で神がモーセを通してイスラエルの民に十戒を与える場面は出エジプト記20章に記されていましたが、ここでそのことがあらためて確認されています。40年前に十戒はシナイ山で与えられましたが、その時生きていた世代は既に死にました。「火の中から」神が「顔と顔とを合わせて語られた」かの光景を知る者は、モーセとヨシュアとカレブしかいません。それでモーセは、神が十戒をどのようにして与えてくださったかを解説しながら、ここであらためて十戒を教えます。

十戒がモーセ五書で二度も登場するのは、それが重要な戒めであることを意味します。それで、「聞きなさい。イスラエルよ。」と冒頭で言われます。これは、申命記では特別に重要なことを教える場合の決まり文句です。十戒は、数ある神の戒めの中でも最も大切な戒めなのです。神の教えはこの十戒に集約されます。それは神のみこころと言い換えることもできます。これを守れば神が喜び、これを守らなければ神が怒る、あるいは悲しむ、それが十戒です。私たちは、十戒を無視して神のみこころを考えたり、論じたりすることはできません。そして、十戒を無視して神を愛することはできません。どんなに神を熱心に礼拝し、讚美し、奉仕し、献身して牧師になったとしても、偶像崇拜をし、安息日を守らず、主の御名をみだりに唱えるならば、それは少しも神を愛することにはなり

ません。神を愛するとは、神以外の何ものをも神とせず、偶像を造らず、主の御名をみだりに唱えず、安息日を守り、父と母を敬うことに他なりません。人を愛することも同様です。どんなに誰かを好きになっても、浮気をして姦淫するならばその人を愛することにはなりません。人を真に愛するとは、殺さず、姦淫せず、盗まず、嘘をつかず、人のものを欲しがらないことです。

「聞きなさい。イスラエルよ。きょう、私があなたがたの耳に語るおきてと定めとを。これを学び、守り行ないなさい。」(1) ここで、モーセは、十戒を「聞け」と命じつつ、それで終わらず、「学び」、さらには「守り」「行こう」よう教えます。神と人を愛するためには、まずはどうすべきか聞かなければなりません。神に「聞く」ことなくして、神と人を愛することがどういうことかを正しく理解できません。そして、神にじっくりと学ばなければなりません。すると、神と人を愛するとはどうすることがわかります。そうなれば、あとはそれをひたすら忠実に「守り」「行こう」従順と実践があるのみです。

「私たちの神、主は、ホレブで私たちと契約を結ばれた。主が、この契約を結ばれたのは、私たちの先祖たちではなく、きょう、ここに生きている私たちひとりひとりと、結ばれたのである。」(2-3) 神は、遡ること四十年前、シナイ山でイスラエルの民に十戒を与えて彼らと契約を結びました。しかし、ここで、モーセは、神が契約を結んだ当事者は、その時の「先祖たち」ではなく、「きょう、ここに生きている私たちひとりひとり」だと言います。実際に直接十戒をもらい受けたのはあの時シナイ山にいた「先祖たち」なのですが、彼らがこの四十年の間に荒野で死んでしまった今となっては、その時居合わせなかった新しい世代の民が契約の当事者となるということです。こうして、十戒は、世代を超え、時代を超えて、有効です。直接十戒をもらい受けた者のみならず、四十年後の新たな世代、さらには今日の私たちにも有効です。旧約の預言者たちは、度々十戒を守るよう人々に教えました。イエスさまもまた十戒を守るよう人々を教えました。宗教改革者たちも、17世紀の清教徒(ピューリタン)も十戒を守るよう教えました。モーセが言うように、十戒は、既に死んだ先祖たちに教えられたものではなく、「きょう、ここに生きている私たちひとりひとり」に教えられました。神は、「きょう、ここに生きている私たちひとりひとりに十戒を教えたのです。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」(6) これが十戒の冒頭にある神の宣言です。十戒の前提です。神はイスラエルを「エジプトの国、奴隷の家から連れ出し」ました。イスラエルはエジプトで奴隷の生活をしていました。奴隷の生活があまりに苦しくて、先祖アブラハムの神に助けを叫び求めました。そして、神は、そのように本当に苦しい奴隷生活をしていたエジプトから救い出してくださいました。これはイスラエルの民にとっては革命的な出来事です。奴隷の苦しみから解放されました。それまでは、エジプトの王パロのもとで強制労働をさせられて徹底的に苦しめられました。奴隷ですから人権もありません。家畜や物と同様です。でも、神は、そのようなエジプトの苦しみから救い出してくださいました。そうして、先祖アブラハムとの約束を果たしてくださいました。

2節の「契約を結ぶ」と訳される表現は、文字通り訳すと「契約を切る」となります。契約を結ぶ当事者は、獣を切り裂いてその間を通り過ぎましたが、その意味は「約束を破った者はこうなる」というものでした。神は、アブラハムと獣を裂いて契約を結んだ時、エジプトに下って400年後に再び約束の地カナンへと連れ出すと約束なさいました。その約束の通りに、神はイスラエルの民を奴隷であったエジプトから救い出してくださいました。神はイスラエルを愛し、恵みを施して、エジプトから救い出してくださいました。だからこそ、神はイスラエルの民に律法を守ることを要求なさいます。神の愛に応じて、神と人を愛するよう求めます。神が約束をしっかりと守ったのだから、お前たちも守れと十戒をくださいました。罪と滅びから救い出して神の民としてくださった神ご自身が、その恵みに応えてこのように生きろと教えます。それが十戒です。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。それ故、あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。…あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。…安息日を守って、これを聖なる日とせよ。…あなたの父と母を敬え。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。あなたの隣人に対し、偽証してはならない。あなたの隣人の妻を欲しがってはならない。」

すなわち、十戒は、神の恵みによって救われた者に与えられた教えなのです。神に愛され、神の恵みを受けた者が、神の愛に応えてどう生きるべきかを具体的に教えたものです。神の愛を受けた者は、当然自分も神と人を愛して生きることになるのですが、具体的には十戒を守って生きます。すなわち、神だけを神として、偶像を造らず、主の御名を尊び、安息日を聖別し、父と母を敬います。そして、殺さず、姦淫せず、盗まず、嘘をつかず、人のものを欲しがりません。十戒は、神と人を愛するキリスト者生活の全体なのです。

律法主義と呼ばれる考えがあります。伝統的に律法そのものを教育しない日本の福音派の教会では、十戒を説教すると「律法主義者」と呼ばれることがあり、どういうわけか、私もそのように揶揄されたことがありました。でも、十戒を教えることがそのまま律法主義なのではありません。律法主義とは、律法を守らなければ救われないという、律法を守ることを救いの条件とする誤った考えのことです。

勿論、本来は神の律法を完璧に守る者が天国に行けるのですが、実際にはそんな人はいません。それで、神は、律法を守ることでできない私たち罪人のために、傷無き小羊を身代わりに屠って、罪を贖うという、もう一つの律法である「儀式律法」をイスラエルに教えました。十戒を教えると同時に、それを破った者が、身代わりのいけにえによって罪が贖われるという救済処置も教えました。つまり、救いは身代わりのいけにえによるのです。小羊の血によります。父なる神は、生けるまことの小羊なる救い主キリストを十字架で殺して、私たち罪人の罪を贖ってくださいました。私たちは、ただ神の愛により、恵みによって救われたのです。そして、神は、愛する御自分の民に、神と人を愛するよう教えます。恵みにより救いへと召した神の民に、恵みに応じて生きるよう教えます。神の愛に応じて、神と人を愛して生きるよう、すなわち十戒を守るよう教えます。

十戒は、罪人に神のみこころと罪を教え、その全ての罪が身代わりの小羊により贖われたことを教え、さらには、罪贖われた者がどう生きるかを、私たち神の子に教えるのです。